酷暑の夏に受け取る、税金のバトン

和歌山県立日高高等学校附属中学校2年A組
〆崎（しめざき）　裕紀（ゆうき）

No. 1

最高気温が四十度以上の日を指す「酷暑日」という言葉が新しくできた。今年の夏も熱中症の危険を感じるほどの暑さが続いており、我が家でも毎日のエアコンが欠かせない状態だ。しかし、毎日エアコンを使い続ける中で、どうしても気になってしまうのが電気代だ。そこで、家計を支援する制度を調べると「電気料金補助」という言葉が出てきた。この補助金の財源も、私たちが納めた税金である。さらに調べてみると、この異常な暑さから国民の命と生活を守るために、国が多額の税金を費やして電気代を抑えてくれているとも知った。

私はそれまで、税金といえば、教科書や道路の整備、警察や消防の活動といった、公共の物やサービスにしか使われていないと思っていた。だが、私たちが毎月支払う電気代のような、身近な生活費の裏側にも税金が使われていることを知り、私は税金に対するイメージが大きく変わった。これまでは、買い物のたびに払う消費税に対して、「お金が減ってもったいない」と、どこか損をしている気持ちを抱いていた。しかし、私たちが納めている税金は、めぐりめぐってこのような「酷暑日」の危機から、私たちの命や健康、そして日々の暮らしを守るために使われている。自分たちの目に見えないところで、社会の安全や暮らしが税金によって維持されていることを見直すと、新たな課題も見えてきた。電気代の補助金についてさらに調べると実感した。

一方で、この補助金には、毎年数千億円もの膨大な税金が使われていることも知った。しかし、その財源は無限ではない。もともとは私たちが納めている税金や、国が将来に向けて発行している国債、つまり「国の借金」が元になっているのだ。今、目の前の電気代が安くなるのは家計の手助けとなるが、補助金に頼り続けてしまうと後に、より大きな税金の負担になって返ってくる可能性もある。ただ「安くなって嬉しい」と喜ぶのではなく、その裏にある未来の負担についても考えたい。

「酷暑日」という言葉ができるほどの厳しい夏をきっかけに、私は税金の恩恵と未来の課題を知ることができた。将来、私が社会に出て働くようになったときには、ただ義務として税金を払うのではなく、社会を支え、次の世代を守るための大切なバトンとして、責任を持って納税に協力したい。

No. 2

No. 3